

特集

天皇と宮中儀礼

二〇一九年十月八日(火)～二〇二〇年一月十九日(日)
東京国立博物館 平成館企画展示室

天皇を中心とする宮廷社会ではさまざまな儀式や行事が執り行なわれてきました。こうした宮中儀礼の多くは平安時代に発達し、華やかな様相が整えられるようになります。鎌倉時代以降、宮廷の衰微とともに儀式や行事も一時期衰退・断絶しましたが、江戸時代になると再興され、江戸時代末まで連続として行なわれました。

宮廷で行なわれる儀式や行事は、年中行事と臨時行事に分けられます。年中行事とは毎年繰り返される行なわれる行事のことで、臨時行事とは天皇の即位や大嘗祭など、そのつど行なわれる儀式のことです。これらは過去の先例を重視したため、絵画作品や歴史資料など、多くの記録に残されてきました。

本特集は、平成から令和への御譲位、御即位により注目の集まる天皇と宮中儀礼を、「即位礼と大嘗祭」「悠紀主基屏風」「御所を飾る絵画」「年中行事」「行幸と御遊」の五つのテーマによって紹介するものです。とりわけ平安時代以降、大嘗祭の際に制作された特別な調度である悠紀主基屏風のなかでも、後桜町天皇の大嘗祭の折に調進された明和元年度の屏風は現存最古の作例で、きわめて貴重な作品です。本特集が、一般には接することの少ないさまざまな宮中の儀式・行事を知るきっかけとなれば幸いです。

Thematic Exhibition Imperial Ceremonies

Tuesday, October 8, 2019 – Sunday, January 19, 2020 Thematic Exhibition Room, Heiseikan, Tokyo National Museum

Imperial ceremonies have traditionally been performed by the Japanese court and its central pillar, the emperor. For these events, precedence has been held in high regard and thorough records have been kept of past ceremonies, including paintings and historical materials.

Recently, public interest in imperial ceremonies has been reinvigorated as the nation transitions from the Heisei emperor to the Reiwa emperor. This thematic exhibition focuses on five aspects of imperial traditions, “The Enthronement Ceremony and the Grand Thanksgiving Festival,” “Scenes from Yuki and Suki Provinces,” “Annual Functions,” “Paintings from the Imperial Palace,” and “Imperial Outings & Entertainment.”



ごそくいず 御即位図

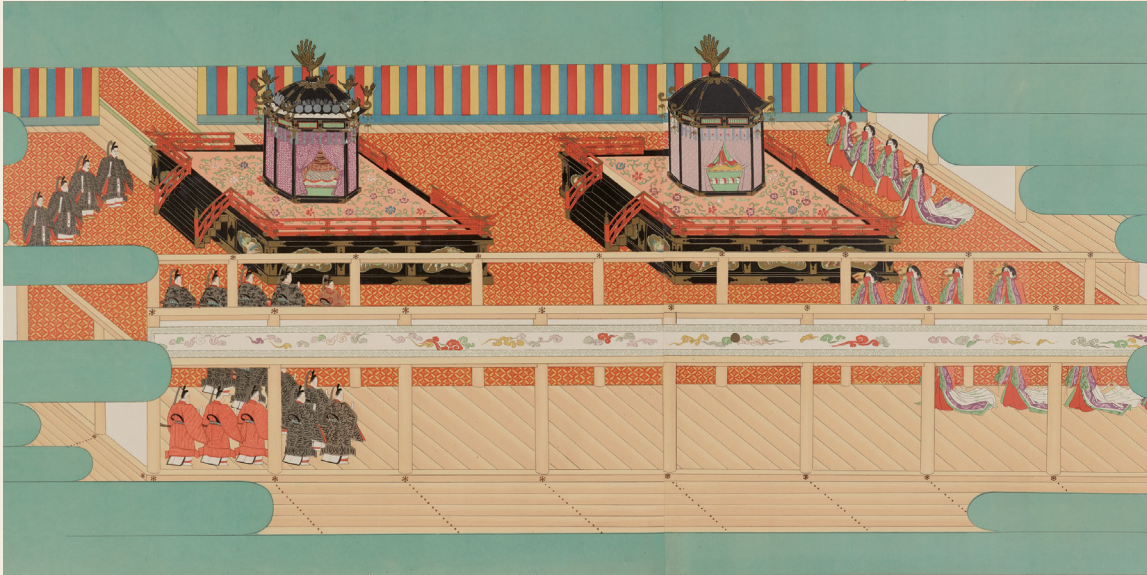
1幅 絹本着色 江戸時代・18世紀

The Enthronement Ceremony
Edo period, 18th century A-9280

江戸時代の即位礼の場を描いた図。内裏の紫宸殿に設営された高御座に天皇が昇り、その周囲に廷臣や女官たちが控えています。紫宸殿の前庭には、銅鳥鐘、日月像鐘、四神旗などが並べ立てられ、盛装した廷臣たちが各自の位置に秩序正しく整列しています。

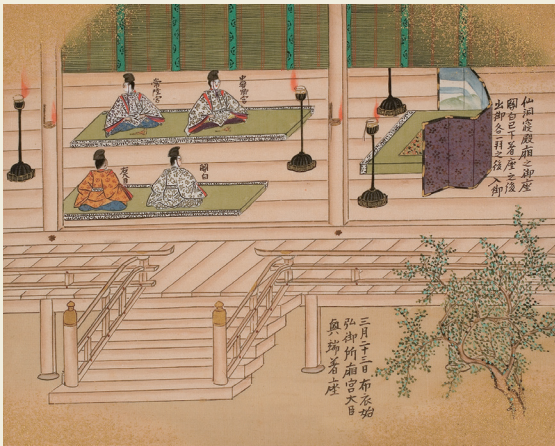
即位礼と大嘗祭

古来、新しい天皇が皇位を継承する時には、皇位を象徴する宝剣と神璽を引き継ぐ儀式がなされます。その後、新帝が高御座に昇って皇位を継承したことを表明する即位礼が行なわれます。即位礼は、古くは大極殿という宮殿で挙行されましたが、同殿の焼亡後は太政官庁、さらに紫宸殿へと遷り、平成度は皇居正殿で行なわれました。また、天皇は毎年十一月に新嘗祭という祭祀を行いますが、新帝が即位後に初めて行なうものは、特に大嘗祭と称して最重要の祭祀とされています。



即位礼

即位礼では、紫宸殿に天皇の御座の高御座を、その東方に皇后の御座の御帳台を設営しました。高御座は八角形で、蓋の頂上に鳳凰、各角に小鳳凰の像を置きます。御帳台は高御座とはほぼ同形ながら、やや小型で蓋の頂上に鷲という瑞鳥の像を置くなどの違いがあります。



第五 院中布衣始

天皇を退位した上皇が、初めて布衣を着用する儀式を布衣始といいます。布衣は狩衣ともいい、元来は野外での服装とされていました。宮廷での正装ではなかったため、天皇は在位中には布衣を着用しないのですが、上皇になると布衣を着用するようになりました。図中の屏風で囲まれている所が上皇の御座です。

旧儀式図画帖

藤島助順筆

48帖のうち2帖 絹本着色 明治時代・19世紀

Album of Past Ceremonies

By Fujishima Sukenobu

Meiji era, 19th century QA-4000



第三 劍璽渡御

江戸時代末期に、光格天皇から皇太子の恵仁親王（仁孝天皇）へと譲位が行なわれた際の記録。仙洞御所である桜町殿から内裏の新帝のもとに、宝剣と神璽が届けられました。劍璽については、宮殿の上では内侍という女官が扱ひ、地上では近衛中将が扱う作法がありました。

この画帖は、昭憲皇太后の命を受けて、藤島助順が光格・仁孝・孝明の三天皇の宮廷で行なわれた儀式行事の記録として作成したもので、全48帖にも及びます。宮廷行事を生き生きと描いており、まるでカラーフィルムの記録映像のような臨場感があります。

こそくい だいじょうさい えまき
御即位大嘗祭絵巻

1巻 紙本墨刷着色 大正4年(1915)

Illustrated Handscroll of the Enthronement Ceremony and the Grand Thanksgiving Festival

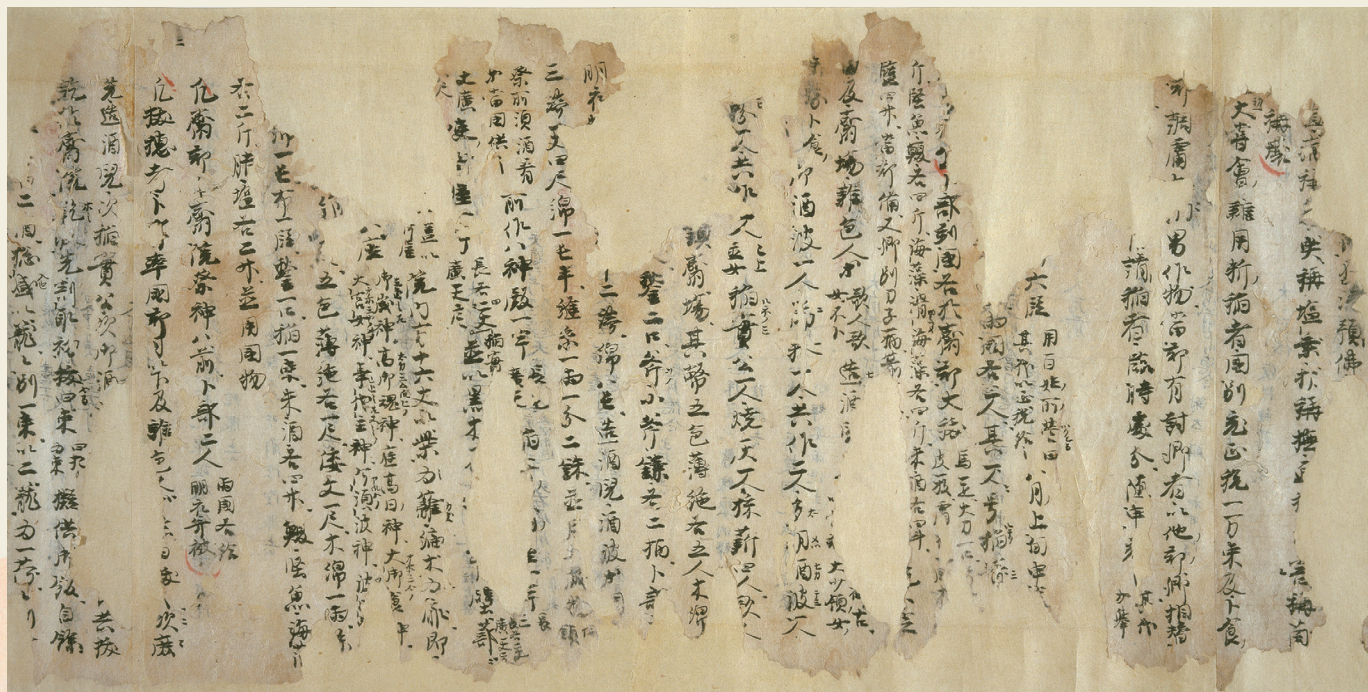
Taisho era, dated 1915 (Taisho 4) FS-265

明治維新ののち、天皇の即位などを規定する登極令が制定され、同令に基づいて大正・昭和の両度の即位礼および大嘗祭の御大典は挙行されました。本絵巻は、大正度の即位礼に際して、登極令の条文に則った御大典の場を描いたものです。



大嘗祭

大嘗祭では日本全国のうちから二国を選んで、それぞれの国の斎田で祭祀に用いる稲を栽培します。選ばれた二国を悠紀・主基といいます。11月の祭日になると、天皇は純白の御斎服を着用されて悠紀・主基の神殿に向かい、みずから祭神に新穀を供えられます。



えんぎしき
●延喜式

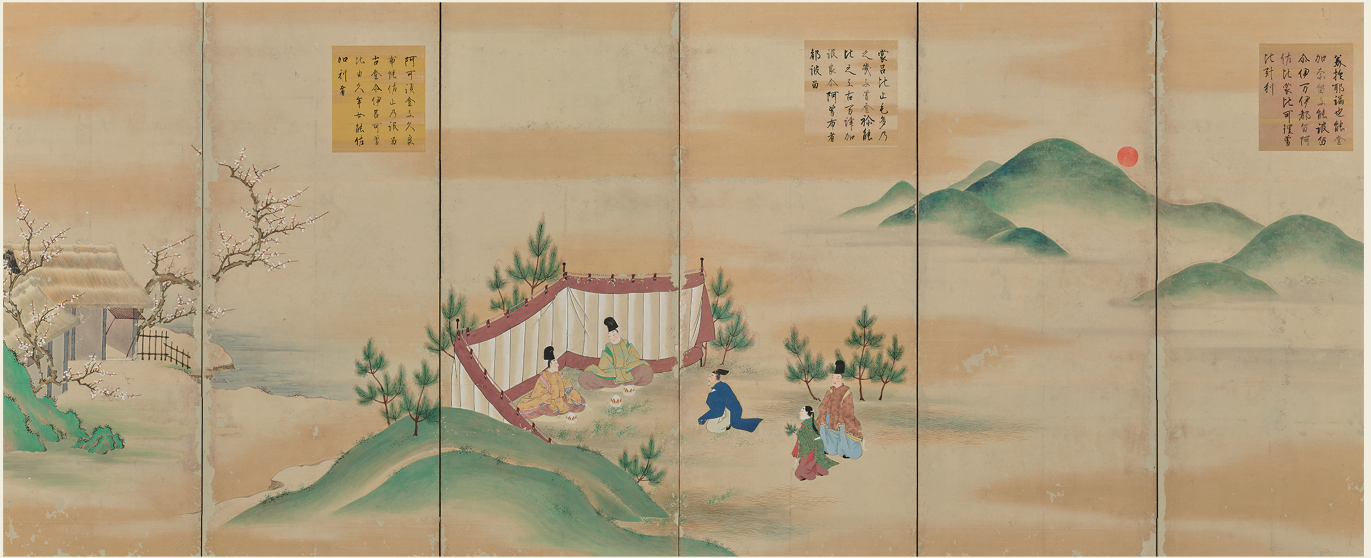
1巻 紙本墨書 平安時代・11世紀

Rules Concerning Ceremonies
Heian period, 11th century B-2370

『延喜式』は、延喜5年(905)から醍醐天皇の命により編纂された、律令制における施行細目を記したものです。巻七では、大嘗祭について、悠紀主基の地を定めることから始まり、大嘗宮を造ることなど、さまざまな詳細を規定しています。

悠紀主基屏風

大嘗祭では、京都から東の悠紀（新穀、酒を献上する国）、西の主基（神饌の新穀を献上する国）の二つの齋国が定められます。平安時代半ば以降、悠紀国は近江国（現滋賀県）、主基国は主に丹波国（現京都府、兵庫県、大阪北部にまたがる地域）または備中国（現岡山県）から選ばれました。この両齋国からさまざまな品が献上されますが、そのなかで重要なもののが悠紀主基屏風（大嘗会屏風）です。



悠紀屏風 明和元年度正月・二月帖



悠紀屏風 文政元年度七月・八月帖

ゆき すき びょうぶ
悠紀主基屏風 (明和元年度)

とさみつさだ
土佐光真筆

6曲 12隻のうち2隻 紙本着色 江戸時代・明和元年(1764)

Scenes from Yuki and Suki Provinces
for the Grand Thanksgiving Festival of 1764

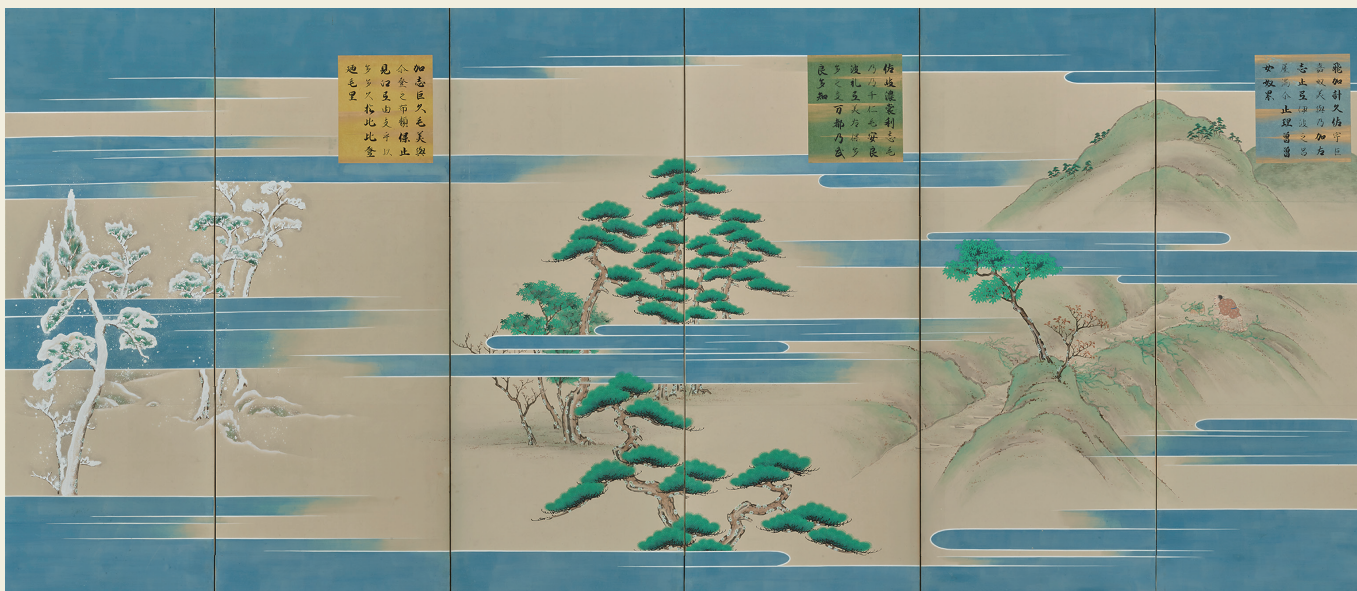
By Tosa Mitsusada

Edo period, dated 1764 (Meiwa 1) A-12457

後桜町天皇(1740~1813)の大嘗会屏風。色紙形に記された3首の和歌は、悠紀の近江国はひのすけ日野資枝(1737~1801)が、主基の丹波国は鳥丸光祖(1746~1806)が詠じたものです。これら明和元年度のものが現存最古の大嘗会屏風です。



主基屏風 明和元年度三月・四月帖



主基屏風 文政元年度十一月・十二月帖

ゆき すき びょうぶ
悠紀主基屏風 (文政元年度)

とさみつさね
土佐光学筆

6曲 10隻のうち2隻 紙本着色 江戸時代・文政元年(1818)

Scenes from Yuki and Suki Provinces
for the Grand Thanksgiving Festival of 1818

By Tosa Mitsuzane

Edo period, dated 1818 (Bunsei 1) A-12460

仁孝天皇(1800~1846)の大嘗会屏風。明和元年度と同じく、悠紀は近江国、主基は丹波国が選ばれています。和歌はそれぞれ、悠紀はひろしたねみだり柳原隆光(1793~1851)が詠じました。群青のすやり霞はこれまでの大嘗会屏風にはなかった表現です。



たいそうのびょうぶ
大宋屏風

6曲2隻 紙本着色 江戸時代・18~19世紀

Figures in Chinese Attire

Edo period, 18th-19th century A-9878

大宋屏風とは、宮中でのさまざまな儀式の際、天皇のそば近くに立てられる屏風のことで、
毬杖と呼ばれる、ポロのような競技をする中国風の人物が描かれており、立姿と馬上姿の二種
があります。本屏風は文化14年(1817)に宮中で制作された大宋屏風の一部の可能性が有ります。



けんじょうのそうじびょうぶ
賢聖障子屏風

すみよしひろゆき
住吉広行筆
8曲4隻のうち1隻 絹本着色 江戸時代・18世紀

Saints and Sages

By Sumiyoshi Hiroyuki

Edo period, 18th century A-1013

賢聖障子とは、内裏^{しんてん}・紫宸殿の天皇の御座の背面にある、中国古代の賢臣を描いた絵のことで
す。現在の京都御所には寛政2年(1790)、住吉広行が描いた賢聖障子が残されており、本図と
同じ図様です。完成見本、もしくは後世の参考のために作られたものと考えられます。

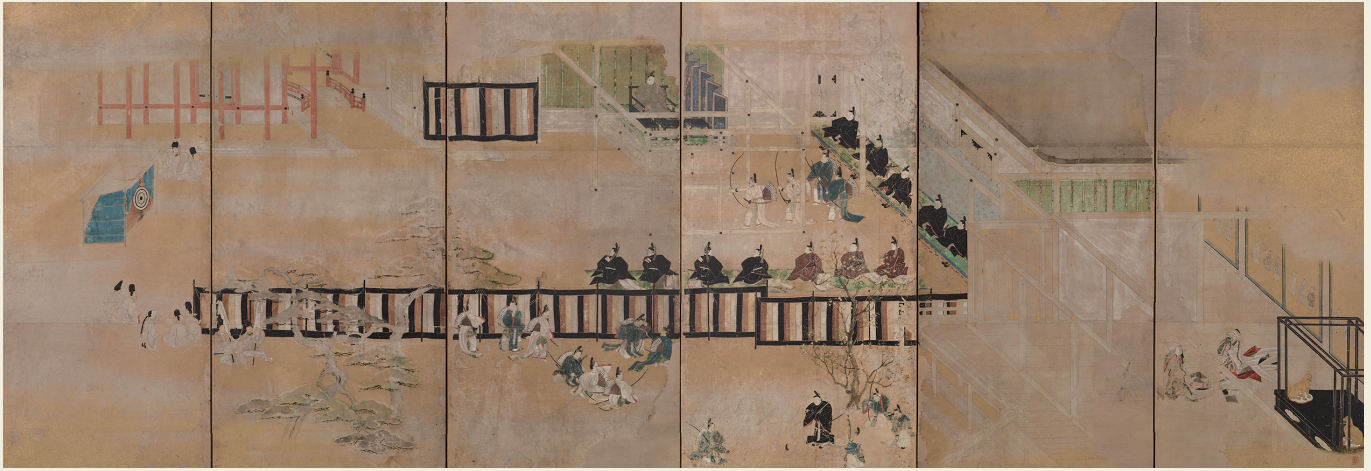


賢聖障子屏風背面の錦花鳥文

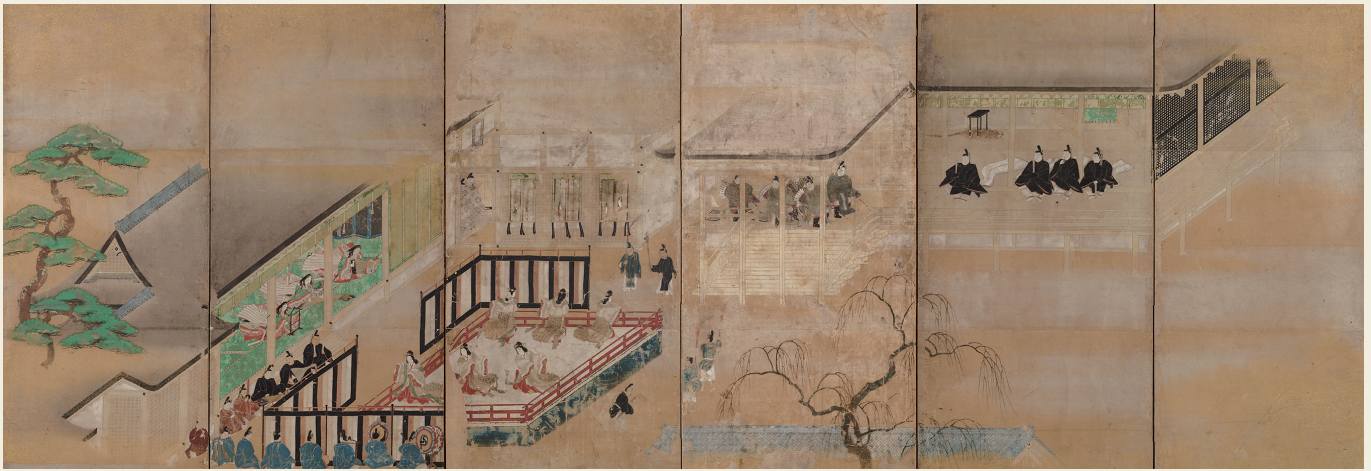
御所を飾る絵画

御所とは天皇の住まう邸宅のことです。平安時代には天皇の住まいであり、政務をとる場でもあったのが内裏^{だいり}です。内裏はいくたびも火災に遭いましたが、南北朝時代から江戸時代の終わりまで、現在の京都御所の地に天皇が住まわれ、ここが内裏としての機能を果たしました。

御所ではさまざまな儀式・行事が行なわれてきました。こうした儀礼を行なう空間には、その場の威儀を整え、華やかにさせる障子絵や屏風絵が用いられました。



右隻



左隻

ねんじゅうぎょうじ ずびょうぶ
年中行事図屏風
 すみよしじょけい
 住吉如慶筆
 6曲1双 紙本着色 江戸時代・17世紀

Scenes of Annual Functions
 By Sumiyoshi Jokei
 Edo period, 17th century A-212

江戸時代初めのみやまと絵師、住吉如慶が描いた屏風です。如慶は後水尾天皇の命で「年中行事絵巻」を模写しており、平安時代の儀式の様子を参考にしながらこの屏風を描いています。右隻に描かれた「賭弓」は、正月十八日に宮中で行なわれた弓の技芸を競う儀式。左隻には「内宴」の様子、なかでも内教坊の妓女たちが舞を披露する場面が描かれています。

年中行事

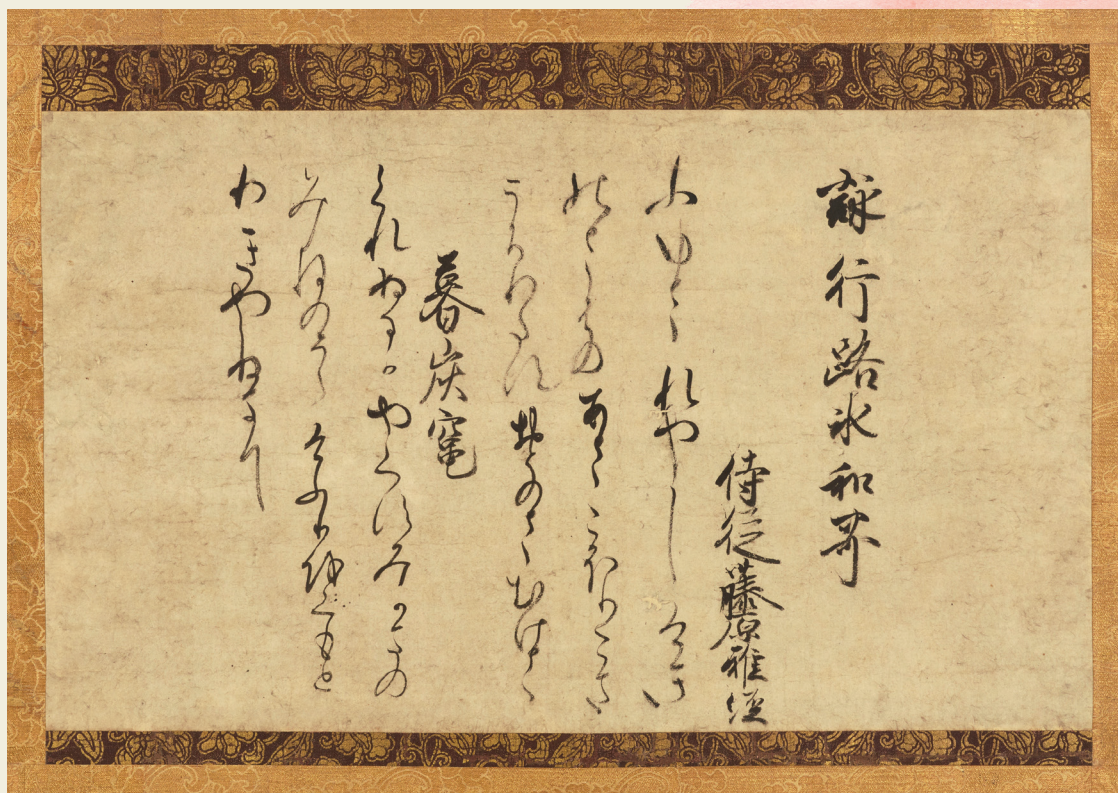
年中行事とは、毎年決まった時期に繰り返し行なわれる行事のことです。たとえば、節分やひな祭、七夕や十五夜のほか、神社のお祭りやお寺の除夜の鐘などは、私たちにもなじみのある行事でしょう。宮中行事に関しては、内裏・清涼殿に「年中行事障子」という衝立が立てられ、そこに年間の行事一覧が記されています。こうした宮中行事はやがて民間にも広まっていきました。日本の気候・風土、とくに四季とかわかって、年中行事は継承されてきたのです。



右隻 賭弓の場面

行幸と御遊

行幸とは天皇が外出することを示す言葉です。また、上皇や法皇の外出は御幸と呼ばれました。行幸・御幸については、さまざまに記録されてきましたが、『源氏物語』などの物語や、『十訓抄』という説話集でも紹介され、絵にも描かれています。それらを見ると、行幸した先では歌会や御遊が催されていたようです。御遊は、管弦（雅楽、催馬楽や朗詠などを楽しむこと）で、平安時代中期にさかに行なわれました。



◎熊野懐紙

飛鳥井雅経筆
1幅 紙本墨書 鎌倉時代・正治2年(1200)

Poem Sheet, Known as *Kumano Kaishi*

By Asukai Masatsune

Kamakura period, dated 1200 (Shoji 2) B-2404

後鳥羽上皇は廷臣とともに熊野三山に30回以上も御幸し、道すがら歌会を開催しました。その和歌を清書したものが、熊野懐紙です。これは正治2年、飛鳥井雅経31歳の筆です。雅経は鎌倉時代初期の公卿で歌人としても有名で、『新古今和歌集』の撰者の一人でした。



第七 修学院御幸始

旧儀式図画帖

藤島助順筆
48帖のうち1帖 絹本着色 明治時代・19世紀

Album of Past Ceremonies

By Fujishima Sukenobu

Meiji era, 19th century QA-4000

後水尾上皇や霊元上皇は、京都郊外の修学院離宮に、しばしば御幸を行ないました。その後、修学院御幸は途絶えていましたが、文政7年(1824)に光格上皇によって再興されました。その再興に先立って、離宮の整備が行なわれて、現在のようなすがたになりました。

●は国宝、◎は重要文化財の指定マークです。



特集 天皇と宮中儀礼

令和元年(2019)10月8日発行

執筆：猪熊兼樹、恵美千鶴子、土屋貴裕、松嶋雅人／撮影：藤瀬雄輔、西川夏永／翻訳：レベッカ・ハーモン（以上、東京国立博物館）

デザイン・制作・印刷：三秀舎

編集・発行：東京国立博物館 ©2019 東京国立博物館